北星学園大学社会福祉学部北星論集第53号（2016年３月）・抜刷

日本の教育システムにおける評価と画一化

――MAXQDA を用いた学校教師へのインタビュー分析を通して――

K.Ulrike NENNSTIEL

中　田　雅　美

中　田　知　生

日本の教育システムにおける評価と画一化
――MAXQDAを用いた学校教師へのインタビュー分析を通して――

K. U. ネンシュティール　中田雅美　中田知生
K. Ulrike NENNSTIEL　Masami NAKATA　Tomoo NAKATA

目次
1．研究の目的
2．データと手続き
3．分析結果
⑴コードとカテゴリー
⑵生成された概念図及びストーリーライン
4．結論

〔Abstract〕
Evaluation and Standardization in the Japanese Education System: Analyzing a Long Interview with a Japanese Teacher by Means of MAXQDA

This study investigates what influence the emphasis on group activities might have on realizing the idea of inclusive education in Japanese schools. We carried out through an in-depth interview with a Japanese school teacher, and analyzed it with MAXQDA. The in-depth interview took place in August 2010. The interviewee was a senior teacher at a public elementary school. The transcription of the tape recording, which exceeded 40,000 characters in the Japanese language, was used as the data of the analysis. In the open coding phase, 235 text segments of the transcription were differently colored in order to extract codes. On the basis of memos, these codes were classified into 18 categories in the axial coding phase. Further analysis using MAXQDA based on the grounded theory approach points to the decisive influence of the evaluation system and the standardization in the Japanese education system, which tends to train students not to think, but rather to read the face of the teacher and give the "right answer." Nonetheless, the interviewee also presents hints for solving this "problem" with the aim of educating young people who are able to read the atmosphere and, at the same time, express their own individual thoughts.

1．研究の目的

本研究の目的は，小学校教師へのin-depthインタビューを分析することを通して，日本の教室内外の教育システムにおけるインクルーシブ教育の可能性を検討することである。

日本社会では格差の拡大が指摘され，それらは子どもの貧困や学生生活に大きく関わっている。文部科学省では，2015年7月16日にチームとしての学校・教職員の在り方に関する作業部会において，いじめや不登校など多様化・複雑化する子どもの状況への対応の必要性，学校教育そのものに対する社会的な要請が高まっていることなどを背景に，スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーなど，多様な専門スタッフが子どもに関わる「チーム学校」を掲げ，学校教育の転換が提案されている。日本の教育システムにおいて，クラス運営や友人関係でお互いを認め合うような寛容な教育現場がこれまで以上に求められているといえる。

インクルーシブ教育は，韓ら（2013）が指摘しているように概念の曖昧さもあり特に統合教育（インテグレーション教育）などと混

キーワード：日本の教育システム，画一化，MAXQDA，質的データ分析
Key words：Japanese Education System, Standardization, MAXQDA, GTA

乱がおきやすい用語であると指摘したうえで，「障害の有無によらず，ともに学び合う場を設定し，その中で健常児も障害児も平等かつ包括的に教育を行うこと」とされている。では，現在の日本の教育システムの現状において，個々の多様性を認め対応することがどれだけ可能なのであろうか。本研究では，日本の公立小学校で数十年の経験を持つ教師を対象にインタビューを行い，生徒たち一人ひとりが持つ異なるニーズを満たすために彼らがどのようにクラス運営をすすめ，そのための基本的な条件は何かを明らかにすることで，日本の教育システムにおけるインクルーシブ教育の実現に向けて考察することとした。

あわせて，in-depth インタビューデータを分析する際には，さまざまな方法があるが，近年その方法のひとつとして，そのような質的データを分析するためのソフトウェアが登場し，しだいに用いられ始めている。本論においても，そのためのソフトウェアである MAXQDA を用いた。特に，そのようなソフトウェアを用いた分析と，筆者らのディスカッションを経た分析を比較することにより，その有用性を確認する。

2．データと手続き

インタビューは，2010年８月に，教師の経験年数が数十年の公立小学校の男性教師を対象に実施された。聞き取りでは，教員の関心やバックグラウンド，教育環境の変化，教師と生徒の関係，理想とする教育等について，２時間以上に及ぶ半構造化インタビューを行った。それらはテープおこしされ，日本語で40,000字以上の，非常に長いデータとなった。分析には，佐藤が説明する①意味的にまとまりのある特定部分のくくり出しと切り抜き，②索引用コード付与による情報の検索と抽出，③索引用コード付与及びコード同士の関係の割り出しによる報告書全体のストーリー構成というエッセンスが含まれる QDA（Qualitative Data Analysis：質的データ分析）ソフトウェアである MAXQDA11（Release11.11）を用いた（佐藤2008）。また，上記ソフトウェアの使用とともに，共同執筆者同士のディスカッションによる質的データ分析を行い，結果の比較も試みた。分析手続きは図１の通りである。

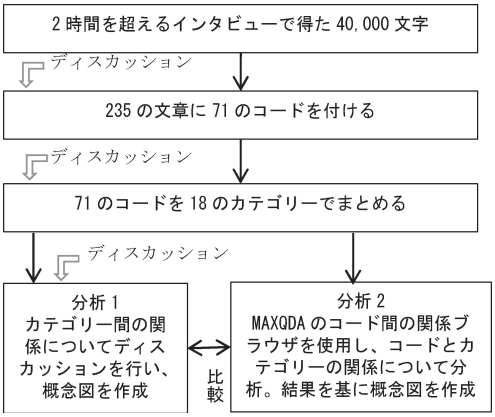


図１　本研究全体の分析プロセス

3．分析結果

⑴　コードとカテゴリー

ここでは，研究者同士のディスカッションと MAXQDA で明らかになった分析結果とそれぞれのストーリーを述べる。まず，235の文章に行ったコード化では，「教員の説明責任」や「学力向上の重視」，「皆同じでなければならない」等，71のコード（表１参照）をつけた。次に71のコードから18のカテゴリーを生成した。以下，カテゴリー別の結果を述べる。

【１．ペルソナを持つ子ども】

ペルソナを持つ子どもには，『喧嘩できるだけの信頼関係』や『集団では本音を言えない子ども』，『自分が出せない男子』『自分を出せば評価されない』『仲間外れを恐れる』『一緒にできない子ども』『空気を読む』『成長と自己表現のむずかしさ』の８つのコード

表1　71のコード一覧

喧嘩できるだけの信頼関係	表面的な情報に左右される	教員と子どもの間の壁
集団では本音を言えない子ども	正解が決まっている大人	目の前の子どもから考える
自分が出せない男子	皆同じでなければならない	感受性の強い子
自分を出せば評価されない	子どもは社会の中で育つ	気遣う子ども
仲間はずれを恐れる	なりたい大人像を考えてみる	感受性への評価
一緒にできない子ども	親じゃない大人に出会う	強さ·早さ·正しさを求めることへの批判
空気を読む	地域の自然な関わり	
成長と自己表現の難しさ	「生きる」ことの教育	「強い」ということ
友人を独占したい女子	男女一緒の場面を作る	学校教育に対する見方の変化
気持ちを言語化する女子	集団を大事な要素として使う	反抗できる親子関係
集団で意見する子ども	成功と失敗の共有	親が子離れできていない
表面的な追従	共通点と相違点を知る	子どもの進路と親の影響
したこととされたことのズレ	子どもの進路と友人の影響	はみ出し者も教員になった
自分の中に収まりきらないストレス	よい集団の中で自分の考えを持つ	いろいろな子がいて当たり前
思い通りに行かないときの表現	互いが尊重される集団作り	教員の管理
自分自身をコントロールできない子ども	共感してもらえた安心感	教員の説明責任
自己防衛のための攻撃	安心して相談できる関係	教員の裁量
内と外へのパワーの出し方	自分を素直に表現する機会	教員のストレス
受験に直結する学校生活	子どもの躓きが大事	ゆとり教育までの教育
学歴による序列付け	失敗を分析する	若い教員への対応
意欲の序列付け	空気をつくる人間に	子どもたちの楽しみが減る
大人のレールに乗ってきた教員	教師像の変化	ゆとりのない教員
わからないことがわからない教員	教育方法の原点	気軽に本音が言えない親
乗せられたレールで考えない若者	わかるとできるのちがい	子育ての評価

がある。ここでは，「体育館で遊んでいると横から見てるんですよね。そして，何日間かそういうことが続いた時に，今度は一緒にというか参加するようには，だんだんなってくるんですよ。でも，そこまですごい時間がかかって，簡単に遊ぶという時に自分からパッと入れない子も出てきた」という『一緒にできない子ども』の様子や，「何というのか，すごく助けてもらったりとか助け合ったりとかいう具体的な場面があったので，恐らく，そういう事ができたのではないか。だから喧嘩をしたり激しいぶつかり合いができるということは，それだけの信頼関係なり係わりが日常の中であった時代だったのではないか」という『喧嘩できるだけの信頼関係』ができにくい今の時代の子どもたちの様子，「友達と自分の本音で係わったりぶつかったりして喧嘩になったりすることを怖がっている，そうなったら友達いなくなっちゃうとか，こう言ったら嫌われちゃうのではないかという思いが，ちょっと今の時代増えているんだなと」いった『仲間外れを恐れる』という子どもたちの心理的な背景，また「本当は自分はそうは思ってないのだけれど，違うでしょと言う

勇気はないというふうに，よく…だから一対一対応というのを一対一でやりとりすると本当に良い子とか素敵な子が多いのだけれど，それが，やっぱり集団になってしまうと，それが出せない」という『集団では本音を言えない子ども』，特に「だんだん学年が上がるにつれて，これは発達段階のこともあるとおもうんですが，やっぱり，自分をなかなか表に出せなくなるというふうになってくる」という『成長と自己表現の難しさ』や，「男の子って言動になかなか表せない場合が多いんですよ。自分の中だけで溜めちゃって一人だけで抱えこんじゃうというか，相談するとかね，言うことが，男の子の場合はどうしてそうした関係が作られちゃったのかな。それはすごくあると思います」といった『自分が出せない男子』について述べられている。この背景にある，「KYとかいってね，うん，そう，空気よめないのかという事を何年間か言われてきていて，その事も大きかったと思うんですが，恐らく日本社会全体がその空気を読むっていうね，だから周りの流れに」といった『空気を読む』時代，「自分をだしていたら評価されないというふうに思っちゃう，ま，自分を守るという術だと思うので，子どもが悪いわけではなくて，それは生きていく為に自然に身につけてきたものだと思うんですよね」という『自分を出せば評価されない』という状況についても触れられている。

【2．仲良し集団】

仲良し集団には，『友人を独占したい女子』『気持ちを言語化する女子』『集団で意見する子ども』『表面的な追従』『したこととされたことのズレ』の5つのコードがある。ここには，「女の子はやっぱり，早い子は2年生，3，4年生ぐらいから友達は自分だけのものじゃないと安心できないという子が女の子はでてきはじめる。だから逆に「女の子の仲良し集団」て，よく僕らはいうのだけれど。仲良し，トイレにいくのも一緒，何処に行くのも一緒，それが他の子と一緒に遊んだりすると「どうして自分じゃない子と遊ぶの？」と感じたりと半分所有物じゃないけど自分の物というように感じちゃうのが女の子は早いし，多い」といった『友人を独占したい女子』や，「女の子は意外とどこかで「この人自分の気持ちを受け止めてくれそうだな」という人が見つかると結構しゃべっていける場合が多いんですよね」といった『気持ちを言語化する女子』といった女子特有の傾向。他，「でもやっぱり違うのではないかという時は，言ってくれるというか，何人かいってくれたり，「どう？」という話になると，そこは同じように思っている子が何人かいて，何人かで言いに来るということはありますよ。一人じゃなかなかいいづらい，でも何人か「そうだよね，じゃ，ちょっと行こうよ」といって来てくれる事」など『集団で意見する子ども』たちについてや，「内容が変わっていっても高学年て結構そういうのが多いんですよね。お互いの気持ちのズレというか自分はすごく感じているんだけど相手のしたことを自分はものすごく強く感じて悩んだり苦しんだりしてるんだけれども相手の子はそれをわかっていない」といった『したこととされたことのズレ』など友人同士の仲良し集団であることの作用についても述べられている。

【3．逸脱の背景】

逸脱の背景には，『自分の中に収まりきらないストレス』『思い通りにいかない時の表現』『自分自身をコントロールできない子ども』『自己防衛のための攻撃』『内と外へのパワーの出し方』の5つのコードがある。ここには，「思春期に入るというあたりでの小学校での学級崩壊とか授業崩壊とか言われてきた頃は，子ども達の，ストレスというか，いろんな形の中での子ども達が自分の中の収まりきらないものというもの」といった思春期特有の『自分の中で収まりきらないストレス』や，「学校が荒れたという1980年前後ぐらい

から90年ぐらいにかけて学校が荒れてきて，そのいろいろ校内暴力が80年あたりであって，校内暴力というのは外に向けて子ども達が抵抗するという出し方だったんですけど，今度，外に向けて出すというのは，ある意味でパワーがあったんだろうと思うんですよね，子ども達にね」といった『内と外へのパワーの出し方』の変化や，「自分自身を自分の中である意味で気を使うのではなくて自分の問題として自分をコントロールするということがしづらくなってきている子も一面で現れている」という『自分自身をコントロールできない子ども』，「面白くないなと思うと「先生，おしっこ」といって「じゃ行っといで」というと一時間ぐらい帰ってこないとか」，「自分自身の思いが強くて自分の気持ちを抑えられなくてバーンと発作をおこしたり叫んだり何かやったりするという子は，もう一面では，きっと増えている」といった『思い通りにいかない時の表現』など現代の現れ方についても述べている。一方で，「自分のつらさとか不安の裏返しが別な自分達と合わない子を攻撃しちゃうということで自分を支えているというかな，安定させているみたいなところがあるのかもしれない」と『自己防衛のための攻撃』ではないかと考察もしている。

【４．子どもの序列付け】

子どもの序列付けには，『受験に直結する学校生活』『学歴による序列付け』『意欲の序列付け』の３つのコードがある。ここには，「どうも，きっと日本の場合は戦前から戦後にかけて教育の面でも急速に変化があって進んできたというというのがあって，…子ども達の学力や進学をグンと伸ばそうという思いもあったんだと思うのですが，その中で画一化されてるところって，随分ペーパーテストでもって学力を計ってつけようという思いというのは，ずっと後まで影響しているのではないかと思うのです」といった『学歴による序列付け』に至る社会的な背景や，「受験校と言われるところとか小学校でも中学受験がすごく多い東京なんかは，やっぱり，受験が中心に歯車が回っちゃうので，そういうところには，恐らく，そんなに時間を割かないで，さぁーと理科学習的なものとしてやったり，保健の勉強としてさっとやったりぐらいで終わっちゃうことが多いかもしれない」といった『受験に直結する学校生活』の現状，特に「用事もないのに授業の質問を捜して先生のところに質問をしに行く，そうすると印象が良くなって評価がそこで上がっていくとかという事がでてくるとか」，「感心とか意欲とか子どもの心の中の事まで，評価の対象にしてそれを受験でいうと内申の中に入れていくということに繋がっていく」といった『意欲の序列付け』の現状についても批判的にとらえている。

【５．考えない若者】

考えない若者には，『大人のレールに乗ってきた教員』『わからないことがわからない教員』『乗せられたレールで考えない若者』『表面的な情報に左右される』の４つのコードがある。ここには現代の教員自体が，「乗せられたレールの上をずーときてしまって，大学にいってから何をするとか，自分のやりたいことがわからない，見えない」『考えない若者』であり，「学校の教師になる人達は，ある意味である程度の受験戦争を越えてきた人達なんですよね。だから，自分が分からなかったとか，悩んだとか，そこで排除された人というのは，あまり教師になっていない」といった『大人のレールに乗ってきた教員』であること。さらには「自分がわからないで困ったという経験がない人が先生になってきているから，ほとんど。勉強についてもわからないという事自体がわからないから，どう教えていいかというところまで検討するところまで中々」といった『わからないことがわからない教員』の現状とともに，マスコミやインターネットの影響で，「今は心配だなと

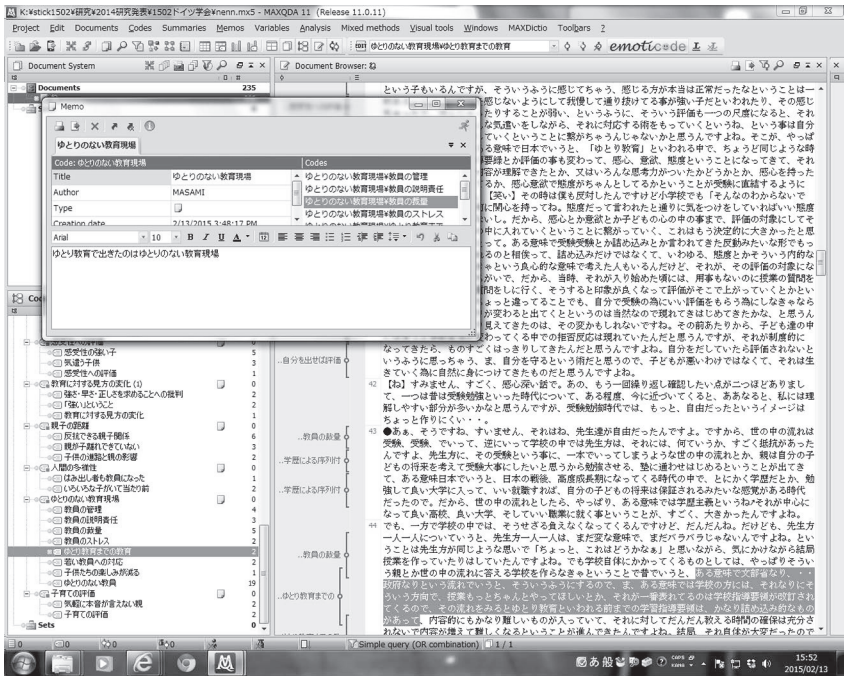


図２　MAXQDA のスクリーンショット

思っているのは色んな情報ですよね。マスコミもそうだけど性的な情報なんかが入ってくるというところに，男の子でいうと女の子に対する見方とか左右されるのが大きい」のではないかという『表面的な情報に左右される』ことへの危惧を示している。

【６．画一化教育】

画一化教育では，『正解が決まっている大人』『皆が同じでなければならない』の２つのコードがある。ここでは，戦後の学力重視の教育方針や指導要領の実施について「移行期は移行ぐらいだったんだけど今はもう事前に完全実施みたいな形でほとんどの学校がやられはじめちゃったので，これは完全に日本中がどの学校も同じようにということが徹底された」という，学校も評価される対象として『皆が同じでなければならない』という意識があること。そして，「教科書の教材に載ってる作者に「勉強したんだけど，ここのところは本当はどういう気持ちなんですか」，とか「どういうことですか」と手紙を書いたりすると多くの作家の人は「それは読む読者が決める事なんです。それを日本では作者はどんなこと考えて書いたのか，というふうに答えを求めたがるけど。作者は「書いた時には当然自分の思いはあるけれども，作品として出来上がったら，独立して，その作品は読者に任せられるんだよ」，という返事が返ってきて，日本の学校の困ったところは，すぐ答えを聞くのに手紙を先生が書いてくるとか，そういうのが困るってよくね，聞いたことあります」といった，固定観念で正解を決めているのは大人であって，子どもは自由に発想できているという『正解が決まっている大人』を指摘をしている。

【７．目指すべき教育像】

目指すべき教育像には，『子どもは社会の中で育つ』『なりたい大人像を考えてみる』『親じゃない大人に出会う』『地域の自然な関わり』『空気をつくる人間に』『「生きる」ことの教育』の６つのコードがある。ここには，「子ども達は一人だけで育つことは中々

できないというふうに押さえているから，子ども達は広い意味でいうと社会の中で育っていく」という『子どもは社会の中で育つ』という考え方や，「自然に周りに友達とかがいっぱいいたという状況が減ってきたのかなって，核家族になったりしながら同時に又それがその地域とかでも，なかなか日本の中で，いわゆる地域にいる隣近所のおじさん，おばさんがね，昔のように悪い時は怒ってくれるし，良かったら褒めてくれるし，という関係もちょっと減ってきた時代になったんだなぁって，その影響が子ども達にもでてきたかなぁというふうに思ったんですけど」といった『地域の自然な関わり』が少なくなっている現代社会の課題も指摘したうえで，そのためにも「方向がその思いと違う方向にいったにしても，どこかで立ち止ってそういうことを自分自身のやりたい大人像というか人間像とかね，それと自分が夢を向けてるかどうかということは，その後，恐らく人生の中でもいろんなところで，そこにもう一回戻って考えてみることができると思うんです」という『なりたい大人像を考えてみる』や，「親じゃない大人とか，先輩とか，そういう係わりが特に小学校高学年から中学生ぐらいにかけてどれだけそういう係わりがもてるかどうか，関係が作れるかどうかということは僕はすごく大きいと思っているんですよね。親しか関係がないと，親子って駄目なんですよね。駄目なんですよねって，そういう意味では。結局すごく親は自然に影響を及ぼしているんだけど，やっぱり，親の言う事には反発したいし，そういう時代の子ども達はね。反発して「もう言わなくてもわかってるよ」と言いたくもなるし，だけどもそうじゃない大人でいいアドバイスしてくれるとか自分の悩みとかも，感情抜きで受け止めてくれて，一緒に考えてくれるという，そういう大人とか自分より年上の人がいるかどうかというのは，ものすごいその子どもが成長していくうえで大きいと思う」という『親じゃない大人に出会う』ことの大切さ，「その時に子ども達は本当に取材をしてお母さん，お父さん，家族の人に，自分がお腹にできた，妊娠したというあたりの事から，生れる前，生れた時，生れた後などを結構聴き取りをして，作文に総合（学習）のかなりの時間を二学期の終わりから三学期にかけて使って，書いているんですよね。その中で，こんなに自分が大事に思われて，本当に生れてくることを望まれて生れてきたんだという事とかを経験しないで今まできたんだけど，そのことに気づいて，分かって，卒業するということは，すごく大きい」という『「生きる」ことの教育』の重要性についても述べている。

【８．集団教育の良さ】

集団教育の良さには，『男女一緒の場面をつくる』『集団を大事な要素として使う』『成功と失敗の共有』『共通点と相違点を知る』『子どもの進路と友人の影響』『よい集団の中で自分の考えを持つ』の６つのコードがある。ここには，「本当に仲が良いという友達がいて話をしているときに，その中で「あ，何々ちゃんも行くから自分も行きたいと思って，逆に勉強を頑張りはじめる子もいるし，そこは本当はね，すごく大事なとこで，いいとこだなと，そういう話ができる関係が中学校でもどう作れるかというのが今なかなか作りにくくなっていると思うんですよね」という『子どもの進路と友人の影響』が少なくなっていることを指摘しているとともに，「一番大事にしたいなと思うのは男の子も女の子も関係なく一緒に遊べたり，一緒に楽しい場面を作ったり，困ったら一緒に相談できたりという，その関係をクラスの中で作れると，結構男の子も女の子に悩み相談したり女の子もという形ができる，そうなるとすごく安心するんですよね」という『男女一緒の場面をつくる』ことや，「子ども達のなかで色んなああだこうだとやりとりがあって，「それ良く

ないのじゃないか」,「こうした方がいいのじゃないか」といって「じゃやってみよう」といって成功したら成功したで自分達が作ったという充実感とか，成就感とかあるし，達成感もあるし，でも失敗したら失敗したで，どうして失敗したのだろうかという，それは一緒に論議してきたから，逆にいうと共通に誰が悪かったかとかではなくて共通に失敗を分析するということができる」『成功と失敗の共有』,「「個人指導」とよく言われて，それはそれで大事なんだけれども，個人個人が自分の考えを持って行くという事と，それがもてないと集団の中で，いい係わり合いをもって学ぶことができないともいえるけれども，同時に自分はまだ発言できないけれども皆で学習していると自分と同じ考えの人がいたなとか，この人ちょっと違うなということを聞きながら自分自身の考えを持てるようになる」というような『共通点と相違点を知る』機会や，『よい集団の中で自分の考え持つ』ことの重要性。そして「授業をやったりする時に誰かがまちがうと特に低学年から僕はよく言ってるのだけれど「今，何々ちゃんがまちがってくれたおかげで，ここで気づかなかったけどここのこともっと詳しく勉強できたよね」という話になっていくと，子ども達はそういう中で勉強していると「今の何々ちゃんの言った意見が答えちがってたけども，すごくいいもの思いついたんだよね」とか，他の子がいってくれたりとか，そうやって響き合ってくというかな，そういういい授業ができる」という『集団を大事な要素として使う』ことが大事であると述べられている。

【9．安心して相談できる場づくり】

安心して相談できる場づくりには,『互いが尊重される集団づくり』『共感してもらえた安心感』『安心して相談できる関係』『自分を素直に表現する機会』の4つのコードがある。ここには,「学習面での集団という時には何をいっても安心できる，周りから馬鹿にされないとか何をいっても，逆に，わからない時には「ちょっと，意味がわからないからもう一回言って」と言ってくれる友達がいてくれて，もう一回話をしていると「あーそうなんだ」と受けとめてもくれたり，場合によっては「自分とは違うんだよね」と言いながら授業を進めていけるといいなぁ，そういうのを一番ほしいなと思っているんですよね」といった『互いが尊重される集団づくり』や,「実際に自分の中ではちょっと違うふうに思っていて，だんだん気持ちがわかってくると，僕でいうと日記を書いてもらっていたので，日記の中に，だんだん仲良くなってくると正直に書かれてくるとか，自分の不安もでてくる」という『自分を素直に表現する機会』を大事にする。それは思春期特有の「マル秘で日記に書いてくるんですよね，マル秘ってね。秘密。絶対いっちゃ駄目とかね。そういう時のことは本人の了承得られないと言わないのだけれど，そういうのが何人とか，いくつか出てきた時に「このクラスじゃないんだけれど」と言いながら，僕は時々ね「前の学校で先生ね5年生受け持った時にこんなことあったんだよ」とか道徳の時間とか話をして「みんなどう思う？」と聞いたら，いろんな意見だしてくれて「そうなんだ，同じようなこと経験した人いる？」と聞いたら結構そんなに気にしない子なんか一人一人「あるある俺も同じ事あった」とか「私も似たようなことあってこうだったよ」という話をしたら，そうするとホッとして，相談に書いてきてくれた子も「私もあった」と皆の前で言ってくれたりしながら「そうなんだ，じゃぁ皆も同じようなことを，そうしたら経験してるんだ」と，なった」といった『共感してもらえた安心感』が得られる。これが「困ったら一緒に相談できたりという，その関係をクラスの中で作れると，結構男の子も女の子に悩み相談したり女の子もという形ができる，そうなるとすごく安心する」といった『安心して相談できる

関係』につながると述べている。

【10．つまづきを大切にする】

つまづきを大切にするには，『子どもの躓きが大事』『失敗を分析する』『空気をつくる人間に』の３つのコードがある。ここには，「失敗は成功の素というのは昔からあってね，正しい事が大事なのではなくて失敗した中から人間て色んなものを生みだしていったり，自分がさらにその失敗をなくしていくいう意味では進歩してきたということでは，そういう意味では正しさが大事なのではなくて失敗した時に，間違った時に其の時にそういう事とどう向き合ってその失敗をどう自分のものにするかということが大事なのではないか」という『子どもの躓きが大事』であり，「子ども達が自分達で何かを取り組んで，トラブルがおきたり何かにぶつかった時に子ども達が自分達で考えて解決したり，乗り越えたりできるような支援をしたいというか子ども達に育てたい」，「共通に誰が悪かったかとかではなくて共通に失敗を分析するということができるのだと思うんですよね。そういう場を子ども達がたくさん作られれば作られるほど，その後，恐らく大人社会に進む時も，生きていく中でも，ものをどういうふうに見ていくか又は失敗してきたことを，どんなふうに分析して次に生かしていくことができるか」という『失敗を分析する』ことの大切さとともに，「空気を読む人間に先生はなってほしくないなぁ，空気をつくる人間になんなよ。自分がこれがいいと思ったらそういうふうにやっていってほしいなぁ」という空気を読むのではなく，その『空気をつくる人間に』なってほしいというインタビュイーの想いも垣間見える。

【11．問題意識】

問題意識には，『教育方法の原点』『教育像の変化』『わかるとできるのちがい』の３つのコードがある。ここには，インタビュイー自身の持つ問題意識について述べられており，大学時代のセツルメント活動や「子どもが生活している家庭とか地域で抱えている問題も一緒に，こう感じながらその子ども達を通して地域とか，ま，ある意味では大きくいうと日本をみていく」という『教育方法の原点』や，「きちっとできるほどに，わかってはいない事が現実には多いのではないか。だから本当に子ども達の思考に沿ってわかるという，そういう教材作りや授業作りをする事は子ども達が本当の意味で，できるということにつながっていくのではないかということを随分教えてもらった」という『わかるとできるのちがい』を意識した取り組み。そして「昔からやっぱり学校の教師というのは子どもとこういうふうにしたいな，良い関係を作りたいなと思いながら，どこかやっぱり教師なので「ああしなさい，こうしなさい」と言われて，そうしなければならないとか，縛られながらやるので，結構，いやなこと言ってみたり，やってみたりして，後で子ども達に「ごめんね」と謝ってみたりすることがよくあったんですよね」といった『教師像の変化』もあった。

【12．目の前の子どもから考える】

目の前の子どもから考えるには，『教員と子どもの間の壁』『目の前の子どもから考える』の２つがある。ここには，「先生に対してクラス皆で一斉に筆入れを落とすとか，授業受けないとかいう方は時々でてきますよね。事件とか何とか聞いたりして。そういう時，難しさはケースバイケースであるとは思うのだけれど恐らく先生と子ども達の間に大きな壁が出来ていると，そうなってしまうのだと思うんですよね」といった，現在の教育現場にある『教員と子どもの間の壁』の存在を示しつつ，「本当は目の前の子どもから出発するんだよと教えられたんです。目の前の子どもがどうか，子どもがどんなふうに感じているのか思っているのかそこが大事で，そこがうまくいっていなかったり否定的な形で出て

きた時には，それは否定的な形で出さざるを得ない何か理由があるのだ，だからそこをどう受け止めて，その子と話をしてみるとか，やりとりをしたり，又はその子自身が気づいていないんだけれども，そういうふうになってしまった理由は何かということを，教師の方がもっと丹念に見つめていかなきゃいけない」という『目の前の子どもから考える』という視点の重要性が述べられている。

【13．感受性への評価】

感受性への評価には，『感受性の強い子』『気遣う子ども』『感受性への評価』の３つのコードがある。ここには，「子ども達の中でのすごい気遣いというかね，必要以上の気づかいが大きいんですよ。ですから，それは表には，ほとんど出さないです子ども達は。いつもにこにこして笑ったりとか冗談を言ったりするんだけども，実際には結構友達関係の事とか又学校の中で先生にどう見られているかということについて，ものすごい気にしていて，ですからそこのところでの気遣いが，これは恐らく子ども自身も当然気づいていないと思うんだけども，そういうふうに生きてきている子がものすごく増えている」『気遣う子ども』や，「学校についても友達についても色んなものについても自分，その子ども達が悪いというより，その子ども達は敏感なんだと思うんですよね。気遣いという意味じゃなくて，ある意味，いい意味での感受性をいっぱい持って」いる『感受性の強い子』の存在，そして「感じないようにして我慢して通り抜けてる事が強い子だといわれたり，そう感じちゃったり，休んじゃったりすることが弱い，というふうに，そういう評価も一つの尺度」として『感受性への評価』もされる現場の苦悩が示されている。

【14．学校教育に対する見方の変化】

学校教育に対する見方の変化には，『強さ・速さ・正しさを求める事への批判』『「強い」ということ』『学校教育に対する見方の変化』の３つのコードがある。ここには，「強いとか早いとか正しいとかという事がすごく今の世の中大事な評価の観点として見られるけども，そうではなくて，早いと見られないようなゆっくり歩いて初めて気づく，周りに咲いている花があったりするのがみられるよ。弱いということには弱いと見られるかもしれないけども，強いということで気にしないで生きていく人には感じられないけど友達や人の悲しみや辛さを感じられるというのは，それは弱いというふうに思われてマイナス面だと思ってるかもしれないけど，そうじゃない，人間として大事な面も入ってるんじゃないか」という『強さ・速さ・正しさを求める事への批判』，特に『「強い」ということ』では，「自分でちょっとつらいことというようなことが我慢できないみたいな事，「弱さに対峙する形で強くなれ」という言い方をされる。強くなれということは自分でデリケートに色んなものを感じてねその事を受けてしまう事を結局なくさないと，それをなくしていかないと平気な顔をして平気では越えられないという状況になっちゃうと思うんです」と指摘している。そしてその背景には，「特に学校の中で溜まってきたものと合わせて学校教育が，やっぱり，流れが家庭で親とかの教育に対する見方にたいしても変化があった」という『学校教育に対する見方の変化』があったと指摘している。

【15．親子の距離】

親子の距離には，『反抗できる親子関係』『親が子離れできていない』『子どもの進路と親の影響』の３つのコードがある。ここには，「反発できるということは，そういうその状況がウチの中にある。そういう状況がないで，小学校，中学校，高校まできてしまって，そこで爆発してしまった反発は取り返しがつかなくなるから怖いなぁと思う」という『反抗できる親子関係』が少なくなってきていることへの危惧や，「親が転ぶ前に支えて

しまう。転ばせればいいのに，転ばせないで。自分で立って歩きはじめた時は，転びながら歩くはずなんだけど，危ない時はすぐ親がすぐ止めてしまうというのは今は多いかもしれない」といった『親が子離れできていない』現状，そして「現実にはその道を選ぶかどうかというところでは親とか学校の力が大きく働いてそっちに行っちゃうことが多いんじゃないんですかね」という『子どもの進路と親の影響』といった，親と子の距離について述べられている。

【16．人間の多様性】

人間の多様性には，『はみ出し者も教員になった』『いろいろな子がいて当たり前』の２つのコードがある。ここには，かつての教育現場と対比しながら，「友達関係も，さっきもいった地域の関係みたいなものと共通しているのだと思うけれど色んな友達がいてね，のんびり屋がいたり，ちょっとグズに見えちゃう子がいたり，そういうのも含めて一緒に友達がいたりとか，結構昔は今より気にしないで相手に「何してんのよ」とかいってバーンと文句をいったり，今以上にあったと思う」という『いろいろな子がいて当たり前』ということ。「僕らの時には逆に「デモシカ教師」と言われて，先生でもなるか，先生しかなれないというふうにしてなったとデモシカ教師多いと否定的に言われたんだけれど，逆にいうと他の職業いろんな物の中で教師でもいいやといってなった人は教師の頭じゃないんですよね。普通の頭だったり，文学やりたいんだけど，それをする為に食っていかなきゃならないので国語の先生になって教えながら小説書いたりする人がいたりとか，色んな，広い分野だったんですよね」といった『はみ出し者も教員になった』教員のもつ多様性についても述べられている。

【17．ゆとりのない教育現場】

ゆとりのない教育現場には，『教員の管理』『教員の説明責任』『教員の裁量』『教員のストレス』『ゆとり教育までの教育』『若い教員への対応』『子どもたちの楽しみが減る』『ゆとりのない教員』の８つのコードがある。ここには，ゆとり教育の前の学生指導要領は，「内容的にもかなり難しいものが入っていて，それに対してだんだん教える時間の確保は充分されないで内容が増えて難しくなるということが進んできたんですよね。結局，それ自体が大変だったので逆に言うと世の中の流れも「受験，受験」という形でくることに対する心配も出てくる時期になってきたということは「ゆとり教育」という言葉が受けも良かった」と『ゆとり教育までの教育』を捉えた上で，現在の教育現場を「何か起こってしまった時に今度はどう責任をとるのかということで，非常に残念な話だけれども，いろんなことを，とにかく親とのやりとりもメモし，記録を取っておく，訴えられた時には，こういうことをやってるんだという事をね，出せるような説明責任をきちっとしなきゃ駄目だ」という『教員の説明責任』や，「学年の先生と相談して，話しして，ちょっとこれやりたいんだけどというふうにやらないとできないし，先生方の忙しさから考えると，それを，そこで教科書にないことをやると，その分進度が遅れるので後で大変つらいことになる」という『教員の裁量』の狭さ，「管理職のリーダーシップという事が言われたりする中で教師の力量をアップさせなきゃとか言われ」ることで，『若い教員への対応』が厳しくなり，「やり始めちゃうと若い人ってやっぱり，すぐ指導の対象になって上の先生方から「そんな事しないで，それやる暇あるんだったら教科書やりなさい」といわれる」『教員の管理』体制になっている。ほかにも放課後がなく会議だとかの作業に追われ，「正直言って１年目というのは子どもと本当に良い関係が作れるかどうかというのが一番大きいはずなんだけど，そこよりも見られる授業で良い授業，評価される授業しなきゃということにいって

しまったり，普通の日常の勤務だけでも先生方結構次の日の授業の準備するだけでもかなり厳しい状況にきているのに，そのほかに初任者とか若い先生方は外に出て，その報告書も書いたり，同時に又，研究授業，校内での授業をするためには指導案を作ったり，という作業がでてくるんですよね」という『ゆとりのない教員』が生まれている。その結果，「その中で睡眠時間がなくなってしまうという人がでてきたり，精神的に追い込まれて，ここ２～３年で東京，静岡の方でも新卒の先生方が自殺しているという状況がでてきている」という『教員のストレス』も指摘されている。加えて，「総合（学習）の中でカバーすることにはなってるんですが。その分，クラブ活動は減るし，委員会活動も減るし，子ども達もクラブ（活動）なんか何回かで終わっちゃうので「え，もう終わり？」とか楽しみが減っちゃた」という『子どもたちの楽しみが減る』という現状もある。

【18．子育ての評価】

子育ての評価には，『気軽に本音が言えない親』『子育ての評価』の２つのコードがある。ここには，「昔，僕が若い頃は先輩のお母さん達が結構いて，子ども達も，兄弟が何人もいて，それで若いお母さんが「ウチの子，こんなことして」と言ったら「何言ってるのよ，ウチの子なんかもっとひどいことしたわよ」といって子育ての先輩として「そんなこと大したことでない，子どもを抱いて，その時にちゃんとやれば大丈夫だから」って言ってくれて懇談会ってどちらかというと，僕自身も若かったから若い先生よりはベテランのお母さん方がいるわけだから，そうやってお母さん方が言ってくれて皆，懇談会にくるとホッとできるというかね。子育ての悩みのことも解消できるとかということが昔はあったんですよね」という一方で，現在は，「今それをお互いに「失敗しちゃったことがあるよ」という先輩のお母さん方と一緒につきあったりすることが，昔に比べたら学級懇談もすごく難しくなってきているんですよね。正直言うとね。お母さん達もなかなか本音は出さないで，靴箱あたりで本音を出すとかね。家に帰ってから仲の良いお母さん同士で本音を出すとか愚痴を言うとかあるかもしれない」という『気軽に本音が言えない親』の現状を述べている。この背景には，「お父さん，お母さん方も恐らく今の時代，子育てというのは自己責任という感じが大きいのではないかと思うんですよね。自分の責任で。でも子育てってそんな簡単に生れてくる子どもが同じ家庭だから同じように育つわけではないし，子ども一人一人違うし，子どもが生れてきて，子どもが何か悪いことをすると，親の育て方が悪いのだといわれる時代になってきている」という親たち自身が『子育ての評価』をされる立場になっているという社会の考え方があると述べている。

⑵ 生成された概念図及びストーリーライン

ここでは，２つの分析を行い，概念図を構築した。まず，分析１では，作成したコード，及びカテゴリーをもとに，筆者らがディスカッションを行ったうえでストーリーラインから概念図（図３参照）を作成した。分析２では，MAXQDA のコード間関係ブラウザという機能により分析を行った。コード間関係ブラウザとは，２つのコードが重複して割り当てられている文書はどれだけの頻度で存在しているかによりコード間の関係を表すもの（図４参照）である。

分析１では，まずは日本の教育で指摘される「ゆとりのない教育現場」があり，その中でも画一的教育，子どもの序列づけ，感受性も評価する今の教育現場のへの危惧が指摘されている。そして子どもだけでなく，学校や教師，親も評価されることにより，空気をよむ，表面的な追従をする「ペルソナを持つ子ども」が生まれている。そのため教員は，目

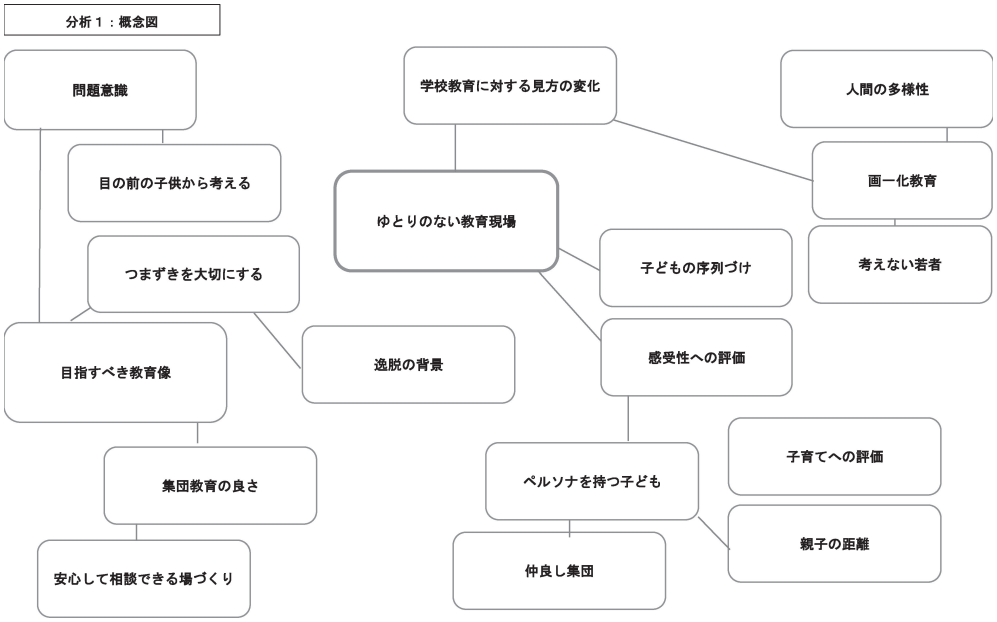


図３　分析１によって作成した概念図

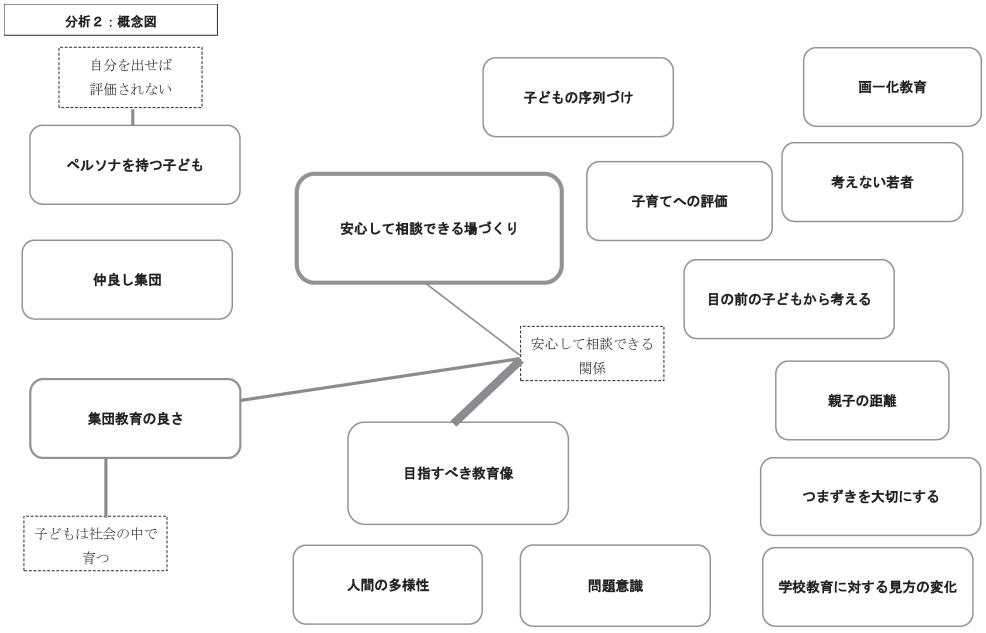


図４　分析２によって作成した概念図

指すべき教育像（背景には問題意識がある）を見据え，目の前の子どもから考える，安心して相談できる場づくり，つまずきを大切にすることの重要性が指摘されている。

分析２では，18あるカテゴリーのうち，逸脱の背景，感受性への評価，ゆとりのない教育現場以外の15カテゴリーにコード間関係が確認できた。最もコード間関係が多く集まっ

たカテゴリーは，「安心して相談できる場づくり」で，次いで「集団教育の良さ」であった。コードで強い関係が見られたコードは，「子供は社会の中で育つ」，「自分を出せば評価されない」，「安心して相談できる関係」であった。

以上の手続きを経て，研究者同士のディスカッションを経たものとMAXQDAを経て明らかになったストーリー自体には，大きな違いはないこと，概念図の比較から，研究者同士のディスカッションから明らかになったものは「教師側」の視点であり，MAXQDAによるものは「生徒側」の視点による結果となっていたこと，異なる結果が出た背景には，研究者が常に問題の背景要因を探る傾向にある事が明らかになった。

4．結 論

教員歴の長い小学校教師へのインタビューを分析することを通して，日本の教育現場における学校・親・子どもに対する評価システムの現状とそれに対する仮面を被る生徒などの歪みが明らかになった。またMAXQDAを使用することで，より客観的にデータがみることができた。

教室内外のインクルーシブ教育に関しては，少なくとも以下のことが明らかになった。

①子ども達も教員も集団を重視する傾向が強いので表面的に見て排除される子どもは少ない。だが，その反面，ペルソナを持って自分を出せない，集団で自分の意見を言えないなどの子どもが多く，安心して相談できる場が十分に確保されていない。

②親が自分の子どもを守る努力をし過ぎて他の子どもや大人との関係を作ることを妨げ，子どもが地域の中で自然に成長できない結果を生み出すことがある。

③教員自身に問題があることもある。つまり，教員になるためには子どもを理解するよりも受験勉強で成功し教職資格を取ることが決定的に重要であるため，目の前の子どもの立場から考えることができないとか，なれていない教員が増えている。こういった教員には子どもの序列を作ったり感受性を「評価」したり，画一化的教育を行う傾向が見て取れた。

④学校教育システムの問題も大きい。教育現場にはゆとりが欠けており，教員には事務的や管理的な仕事でいっぱいで，子どもたちとの関係を作ることに時間をかける余裕はない。内容的には受験勉強における画一的な回答の訓練が，人との関係においては，優しさと思いやりよりも競争で負けない「強さ」が求められているため，各々の子供が持っている能力を発育・成長させることが困難である。

概して，集団教育はインクルジーブ教育の実現の可能性を充分にもっているが，そのためには各々のレベルで教室内外の条件を改善することが今後の課題であろう。

なお，本論は，「2014年度北星学園大学特定研究費による研究の成果の一部である。

引用文献

1）韓昌完，小原愛子，矢野夏樹，青木真理恵（2013）『日本の特別支援教育におけるインクルーシブ教育の現状と今後の課題に関する文献的考察 ―現状分析と国際比較分析を通して―』，『琉球大学教育学部紀要（83）』，113-120，琉球大学

2）佐藤郁哉（2008）『QDAソフトを活用する実践 質的データ分析入門』，37，新曜社